

V・G・ヴェンジェル

『現段階のホルホーズ体制』

モスクワ「経済」出版所、一九六六年刊、三〇二頁

В.Г.Венжер, *Колхозный строй на современном этапе*, Издательство "Экономика" 1966г., стр. 302.

丸 毛 忍

—

V・G・ヴェンジェルは、一九五二年の秋に出たスターリンの最後の著書『ソ連邦における社会主義の経済的諸問題』のなかで、「ホルホーズの所有を全人民的所有の水準にまで高めるために、MTS（機械トラクター・ステーション）の主要な生産手段をホルホーズに売却せよ」との提案を、スターリンにこっぴどく批判されて有名になった学者だ。五三年二月スターリンは死亡、MTSの機械は五八年フルシチョフによってホルホーズに売却された。その後の歴史の歩みはスターリンよりヴェンジェルに味方したようである。かれは本書のなかでちよっぴり

だが、スターリンに一矢むくいている（八八頁、一四三頁）。現在、ヴェンジェルは科学アカデミー経済研究所の所員であり、機関誌『経済の諸問題』に、農業に関する論文をときどき発表している。

ソ連でも農業問題の研究には伝統的な二つの流れがある。総合大学の経済学部と系統の学問と農科大学の農業経済学部の系統の学問とがそれである。前者はより一般的、理論的であり、後者はより実学的、技術的な性格が強い。後者の系統には、大学の学部では自然科学系の学問をやり、大学院過程で農業経済学を専攻した人、ホルホーズ、ソフホーズの技師やマネージャーなどの経験をもった人が、かなりいることも無関係ではあるまい。

科学アカデミーの経済研究所と農業省の農業経済研究所とのそれぞれの研究の性格にも、この二つの流れが反映しているように思われる。ヴェンジェルはどちらかといえば、前者のタイプの学者だろう。

二

本書は現段階のホルホーズを理論的実地的に分析したヴェンジェルの新著であり、一九六六年に出版されている。その編別構成を示せば次のとおりである。

序説

第一章 社会主義農業体系中的コルホーズ生産（コルホーズ

——共産主義の学校、コルホーズとソフホーズ、副業的な社会化農業と個人農業）

第二章 コルホーズ生産の社会化過程の展開（コルホーズ生産の集積と社会化過程、蓄積とコルホーズ生産の社会化過程、コルホーズの労働社会化度の向上）

第三章 協同組合・コルホーズ的所有の完成の問題（協同組合・コルホーズ的所有の形成、社会的、協同組合・コルホーズ的所有）

第四章 コルホーズ経済発展の実際問題（コルホーズ生産物の価格形成、コルホーズ生産の専門化、コルホーズの物質的刺戟）

第五章 農業の生産構成の改善

第六章 農業の物質的・技術的基礎

ヴェンジェルは序説では、ソ連のコルホーズ建設の経験もつ世界史的意義と関連してかれの問題意識をのべ、第一章ではコルホーズの制度的特徴を、第二章ではコルホーズの生産規模と資本、労働の社会化過程を、第三章ではコルホーズの所有の性格を、それぞれソフホーズや工業企業と比較し、あるいは東

欧諸国の経験と比較しながら、事実在即して明らかにし、第四章ではコルホーズの当面する経済問題を論じ、第五章では土地利用を中心に、第六章では機械体系を中心に、コルホーズ生産の構成を追求している。

本書は、従来のソ連の類書にみるような、実証を全く無視し、指導者の政治報告の引用などにもとづく公式的な理論をふりまわし、あるいは全く無味乾燥な事実を羅列するといった式のものではない。現実の経済的分析を行なうと同時に、きわめて慎重ながら、自らの考え方にもとづいてある程度の新しい理論的展開を試みている。やはり、ここにも最近のソ連の経済学の経験しつつある変化が読みとられる。

だが、本書の価値は何よりもまず、その豊富なデータにあらう。たとえば、「三三三〇万にのぼるコルホーズ農民、労働者、勤務員の個人副業経営」、「コルホーズ農民の男女別、地域別労働日数」、「コルホーズ農民の労働前払の諸財源」、「土地利用のアメリカとの比較」などについてのデータは、普通の統計集には発見できないものである。このような例は無数にある。

ソ連のコルホーズの現状を体系的に知るのに好適な本である。

三

気のついた二、三の問題点にふれよう。

ヴェンジェルはソ連のコルホーズ建設の経験は、今日では世界の諸国、ことに多数の発展途上国の農業変革にとって普遍的な意義をもつことを主張するが、その際、世界の諸国を工業国と農業国の二つのグループに分け、ソ連や東欧諸国をアメリカやイギリスとならんで工業国グループに入れ、中国をインド、アフリカ諸国などと一緒に農業国グループに入れているのは注目される。社会主義国もまた工業国、農業国に分けられているわけだ。これはもちろんコストウ理論とは無関係だろうが、従来の単純な生産関係にもとづく分け方より実際的である。

ソ連の経験を一般化するに当っては、コルホーズ建設の犯した誤りや欠陥を明らかにする必要があることを特に強調しているのは、著者の理論展開の意図を示すが、同時に従来ソ連学者の所説とニュアンスの違ってきたことを感じさせて興味深い。ただし、行論のなかの自己批判はほとんど過去の事実に関するもののみだ。スターリンは攻撃しても、レーニンは絶対に正しかったという態度は、やはり物足りない。なおソ連の誤りや欠陥の指摘——たとえば、初期の農業コンミュニンの失敗——は、あるいは中国の人民公社にたいする間接的な批判を含意しているのかも知れない。

以前には使用されなかった例のない社会学的 (sociological) という表現が、しばしば出てくるのも新しいことの一つだ。農業間

題は政治や経済の視角から捉えるだけでは不十分なことを、ソ連の学者も自覚しはじめた証拠とみてよい。

ヴェンジェルはコルホーズを歴史の試練を経て生き残った永續性・普遍性をもつ制度として、ソフホーズと詳細に比較しながら、その「本質を社会主義的、形態を協同組合的」と規定しているが、その際、個人副業経営はその数三千万以上、関係者一億人におよぶ社会的な大問題であり、かつ、個人副業経営をもつ工業労働者・勤務員が低所得者であることを明らかにしたのは、コルホーズ理解にとって一前進といえよう。

生産の集積と社会化過程を論じた第二章は、ソ連の土地利用なり機械装備の立遅れを具体的に明らかにした第五、第六章とあわせ読むことによって、社会主義のもとにおける生産関係と生産力との相互規制やソ連農業の歴史的な性格について、興味ある問題をひき出すことができる。

コルホーズ化や協同組合の所有について、逆の学者はいつもレーニンの『協同組合計画』を持ち出すが、レーニンは、エンゲルスが『フランスとドイツの農民問題』にのべた以上のこととは、ほとんど展開してないのではないか。本書でもその点ではレーニンからの厳密な引用はなされてない。

ソ連のコルホーズと組合員の土地私有をみとめる東欧の生産協同組合とを比較し、組合員の土地持分にたいする支払を社会

主義のもとでは農産物価格は社会的生産費の枠内で決まるから、絶対地代でなく、組合員の過去の労働投下にたいする補償であるとする見解は（二〇九～二一〇頁）、にわかに賛同しがたい。また、ここでは土地の社会化と経営のコルホーズ化のいずれを先行すべきかについて、ソ連と東欧諸国の経験が比較されている。

著者は協同組合・コルホーズ所有の性格とコルホーズ経営との関連、商品生産の必然性を論じながら、同時にこの集団的所有が共產主義所有に移る中間形態として、工業と農業との、国家とコルホーズとの混合コンビナート形態を重視しているが、これはむしろ移行の問題というより、ソ連の農業生産の商品化、専門化の立遅れの問題とみるべきだろう。

ソ連の農産物価格は最近漸くコストをカバーできる水準にまで引上げられたが、ヴェンジェルもまた価格を農業の地帯別、経営別専門化の問題と結びつけて解決しようと考えている一人だ。かれは農産物の価格は最劣等地の生産費でなく、「合理的専門化の実施された地帯の平均生産費で決定すべきだ」（一七五頁）と主張する。現在五〇％の割増のつく国家への計画超過販売価格（たとえば小麦）は、かれによれば、農産物の価値にはほひとしいという。将来農産物の価格が全般的に価値の水準に近づき、コルホーズが完全独立採算を実施し、市場関係が一

層発展することによって、ソ連農業は急速にのびるというのが、かれの結論のようだ。その際、かれは現在の中央計画による農産物の配分は一時的なものであり、将来は全農産物の自由な実現が行なわれると予想している。だが、かれのいう「経済法則の意識的利用」、「市場の組織性」、はそこではどう働くのかもつとそのままに農業蓄積の移転に基礎をおいた従来の工業化資金形成方式は、現在具体的にどうなっており、今後どう変わるのか、などについては問題を残したままである。

専門化と関連して適正規模を論じた章では、大経営の小経営にたいする優越は資本主義の問題であり、コルホーズ、ソフホーズはすべて大経営であるから、このような接近は無意味であるというが、適正規模についての概念や尺度は何も明示していない。

ヴェンジェルの新著は現段階のコルホーズの多くの問題に答えようと試みた、ソ連農業を研究するものに見落してはならない、密度の高い力作だといつてよい。おわりに、著者に敬意を表すると同時に、今後さらに大胆な問題提起やつっ込んだ分析を期待したい。